

立方格子の投影による準格子

1 準格子の構成

3次元空間における直交単位ベクトルを e_1, e_2, e_3 とすると立方格子点 p は

$$p = p_1 e_1 + p_2 e_2 + p_3 e_3 \quad (p_1, p_2, p_3 : \text{整数}) \quad (1)$$

で与えられる．原点 $(0,0,0)$ を通る平面 Π_0 と格子点 $(1,1,1)$ を通り Π_0 に平行な平面 Π に挟まれた立方格子点を Π_0 に投影してできる2次元格子が「準格子」である．図1に示すように Π_0 内に互いに直交する単位ベクトル e'_1, e'_2 を定義し，これらのベクトル積で与えられる単位ベクトル e'_3 を定義するとこれらは直交変換行列 T によって次式で与えられる．

$$e'_j = \sum_{k=1}^3 t_{jk} e_k \quad (j = 1, 2, 3) \quad (2)$$

ここに t_{jk} は T の要素で， $t_{jk} = e'_j e_k$ である．また， p_j は変換式

$$p'_j = \sum_{k=1}^3 t_{jk} p_k \quad (j = 1, 2, 3) \quad (3)$$

によって新しい座標 p'_j に変換される．平面 Π_0 と Π の間の格子点 (p_1, p_2, p_3) の条件は次式で与えられる．

$$0 \leq p'_3 < \sum_{k=1}^3 t_{3k} \quad (4)$$

上式を満たす (p_1, p_2, p_3) を (3) に代入することによって平面 Π_0 上に準格子点 (p'_1, p'_2) が得られる．(4) は平面 Π_0 と Π 間に目を置いて立方格子点を眺めたとき2平面間にある格子点の条件であるから所謂「窓」と呼ばれる．図2からわかるように，平面 Π_0 に投影されて得られるセルは立方体の3種類の側面からのものである．

すなわち，単位ベクトル e_1, e_2, e_3 を平面 Π_0 に投影された格子をそれぞれ $e_1^{\parallel}, e_2^{\parallel}, e_3^{\parallel}$ とすると，

$$e_j^{\parallel} = t_{1j} e'_1 + t_{2j} e'_2, \quad (j = 1, 2, 3). \quad (5)$$

得られる準格子は3種類のセルから構成される． e_1^{\parallel} と e_2^{\parallel} よりの平行四辺形のセル， e_2^{\parallel} と e_3^{\parallel} よりの平行四辺形のセル，および e_3^{\parallel} と e_1^{\parallel} よりの平行四辺形のセルのである．これらのセルをそれぞれ (2,3) セル，(3,1) セルおよび (1,2) セルと名付ける．各セルが2平面内に存在し得る個数は図2か

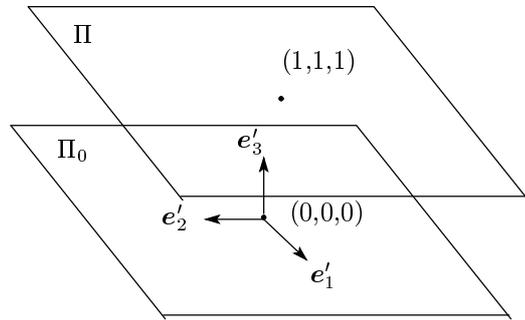


図1: 平面 Π_0 と Π

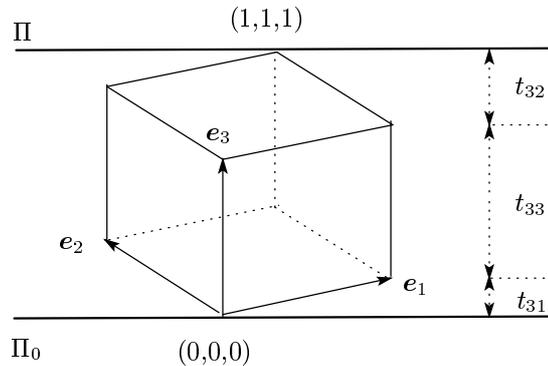


図2: 窓の間隔

らわかるようにそれぞれ t_{31}, t_{32}, t_{33} に比例する．また，各セルの面積はそれぞれ $S_1 = |e_1^{\parallel} \times e_2^{\parallel}|$ ， $S_2 = |e_2^{\parallel} \times e_3^{\parallel}|$ ，および $S_3 = |e_3^{\parallel} \times e_1^{\parallel}|$ であるから，得られる準格子点の面密度 ω は

$$\omega = \frac{\sum_{k=1}^3 t_{3k}}{\sum_{k=1}^3 t_{3k} S_k}. \quad (6)$$

然るに，上式の分母は

$$\sum_{k=1}^3 t_{3k} S_k = \sum_{(ijk)} t_{3k} |e_i^{\parallel} \times e_j^{\parallel}| = \sum_{(ijk)} t_{3k} (t_{1i} t_{2j} - t_{2i} t_{1j}) = |T| = 1. \quad (7)$$

なお，上式における和は $(ijk) = (231), (312), (123)$ についてである．したがって，

$$\omega = \sum_{k=1}^3 t_{3k}. \quad (8)$$

2 準格子の特徴

平面 Π_0 の法線方向係数を (H, K, L) とすると，

$$e'_3 = \frac{1}{F}(He_1 + Ke_2 + Le_3), \text{ ただし } F = \sqrt{H^2 + K^2 + L^2}. \quad (9)$$

e'_2 を e_3 と e'_3 に直交するよう選ぶと

$$e'_2 = \frac{e_3 \times e'_3}{|e_3 \times e'_3|} = \frac{1}{G}(-Ke_1 + He_2), \text{ ただし } G = \sqrt{H^2 + K^2}. \quad (10)$$

e'_1 は

$$e'_1 = e'_2 \times e'_3 = \frac{L}{FG}(He_1 + Ke_2) - \frac{G}{F}e_3. \quad (11)$$

したがって， T は次式で与えられる．

$$T = \begin{pmatrix} \frac{LH}{FG} & \frac{LK}{FG} & -\frac{G}{F} \\ -\frac{K}{G} & \frac{H}{G} & 0 \\ \frac{H}{F} & \frac{K}{F} & \frac{L}{F} \end{pmatrix}. \quad (12)$$

準格子の各セルの割合および面密度は

$$c_1 = \frac{H}{H+K+L}, \quad c_2 = \frac{K}{H+K+L}, \quad c_3 = \frac{L}{H+K+L}, \quad (13)$$

$$\omega = \frac{H+K+L}{\sqrt{H^2 + K^2 + L^2}}. \quad (14)$$

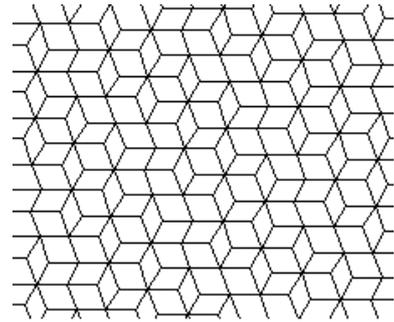


図 3: 準格子の実例

図 3 には，平面 Π_0 の法線方向係数が $(15, 12, 10)$ の場合に得られる準格子と各セルが示されている．